P2-4　　ご利用児の主体的な療育の参加に焦点を当てて介入した事例

○禎　保名美[1)]，　亀田　志保[1)]，原田　伸吾[1)]

1) こどものつむぎ2号

Keywords：発達支援，エンパワメント，放課後等デイサービス

【はじめに】

今回，アテトーゼ型脳性麻痺を呈する事例に対しご利用児が療育に対して受動的な参加から主体的な参加に変化した経過について報告する。

【基本情報】

A君，8歳，男児．アテトーゼ型脳性麻痺．３人兄弟の長男．5人暮らし．ADL自立．短下肢装具を着用．走ることが出来るが，バランスを崩して転倒することがある．自分で決めた事は粘り強く取り組むことができる．注意がそれて指示が入りにくいことがあるが，言語指示で理解することができる．知的能力に遅れはみられない．小学校の支援学級（肢体不自由児クラス）に通学し放課後は学童に通う．小学１年生の頃から週に１回放課後等デイサービスを利用．小学２年生から月に１回保育所等訪問支援を利用している．両親から「学校の活動がスムーズに出来るように療育を受け，自信を持って色んな活動に取り組めるようになってほしい.」という思いの元で療育を行う．

【作業療法評価】

母親との面接で「音楽の授業でリコーダーが吹けず,家で悔しそうにしていた.リコーダーの使い方,息の使い方が気になるので見てほしい.」というニーズを聞きとる．

当事業所でのリコーダーを吹く様子を観察した.リコーダーの吹口を深く咥えて下の穴から唾液が漏れやすい．呼気が強すぎて綺麗な音を出すのが難しい様子．リコーダーを吹くと穴を押さえきれず隙間ができる．シの音のように左手だけで音を出す際に右手でもリコーダーの穴を押さえてしまい出したい音が出せなかった．

【介入経過】

介入１回目：リコーダーの練習を促すが，他児と遊びたい気持ちがあり練習に取り組むまでに時間がかかる．遊びの時間と切り替えを促す為に練習内容・練習が終わる時間を支援者が決めて介入する．集中して演奏を行うために，膝にタオルをかける．姿勢の安定を促す事を目的に足底が接地する椅子に端座位で実施．A君がリコーダーを演奏する様子を撮影する．A君と一緒に撮影した動画を見ながらリコーダーを演奏する様子を振り返りを行い、目標を達成する為に必要な事を一緒に考える．

介入２回目：前回と同様にリコーダーを演奏する様子を撮影して振り返る．リコーダーの持ち方が安定していたことを伝えると「次は指の動かし方を意識しようかな」と自ら話すことができていた．

介入３回目：A 君に療育に対する主体的な参加を促すことを目的に計画シートを作成．今日の目標、達成する為の作戦を一緒に考えシートに記入してもらう．何時まで取り組むかをA君自身が決める．実践後に作戦の振り返りを行う．決めた時間まで練習に取り組み，今日の目標を達成することができた．次回の目標にしたいことを話す．作業療法士はリコーダーに補助具を付けることを提案するが，A君は「特別は嫌だ，みんなと同じがいい.」と返答した．

介入４回目：前回の療育内容を確認した後に自ら今日の目標を決める．前回と同様に決めた時間まで練習を取り組むことができた．

【考察】

本事例への介入は，CO-OP で言われているグローバルストラテジーの Goal-Plan-Do-Check において，A 君の参加を促し，協働して取り組むことを意識して行ったことで，A 君は療育に対して主体的に取り組むようになったと考える．また，療育に対する主体的な参加を通して，A 君のエンパワメントの支援に繋がったと考える．作業療法の全過程において、クライエントが主体的に参加することの大切さを再確認した．